

池田家文庫等貴重資料展

備前慶長国絵図のふしぎ

期間:平成12年10月23日(月)~11月1日(水)

会場:岡山大学附属図書館 特殊資料展示室



▲ 1. 備前国図

岡山大学附属図書館《2000》

備 BIZEN 前



慶長国絵図のふしぎ

江戸幕府は、全国を統治していることのあかしとして、各地の大名に国ごとの地図(国絵図)と土地台帳(郷帳)の提出をたびたび命じました。そうした試みの最初は徳川家康によって幕府が開かれた直後の慶長10年(1605)頃であったと言われています。この慶長国絵図の作成事業については関連史料も少なく、いまだ不明な点が多く残っています。また、現存している慶長国絵図も西国を中心とした十余国のものに限られています。

岡山大学附属図書館が所蔵する池田家文庫には、寛永期・正保期・元禄期に幕府に提出された備前と備中の国絵図の控図が残されていますが、これらの絵図よりさらに古いと思われる国絵図もあります。それが今回ご紹介する備前国図です。全体の描法は寛永期以前

の古い画風を残しており、慶長期国絵図の一枚として取り上げてよいものですが、幕府に提出された国絵図との関係は明らかではありません。ちなみに、当時備前国を実質的に支配していたのは、後に岡山藩主となる池田光政の父である池田利隆でした。

この絵図に描かれた備前国の形は、ほぼ正方形に近く、津高郡北部の出っ張りが実際より小さく、播磨国と接する東南の海岸部が北へ上がり過ぎており、全体として南北に間延びしています。児島は全体として縮んだような形になっていて、形もかなりデフォルメされています。こうした国全体の形だけでなく、この絵図には他の備前国絵図とは違った点がいくつかあります。この備前国図のふしぎな点をいくつかあげてみましょう。

Q 備前一国28万6200石は 1 慶長期の石高か？

図の上方北西の余白部分に、「高都合貳拾八万六千貳百石ノ内貳千四百五拾石 寺領」の付紙があります。図中の各郡名の下にも付紙があり、郡の石高と寺領高が記されています。備前一国の朱印高は28万200石で、元和元年(1615)に池田忠雄が入国した時に確定されたと推定されています。以後幕末まで変化しません。これに対して、28万6200石は、利隆時代の備前一国高で、慶長十年の指出高も「二十八万六千石余」となっています。この一国高の付紙は、この絵図が慶長国絵図と関連の深いものであることを示唆しています。

Q 村の名前や郡境が 2 古いままか？

この絵図では村形は円形で、郡ごとに色分けされています。国絵図では普通その中に村名と村高を書きますが、ここでは村高は記されていません。幕府に指し出したと思われる「慶長十年備前国高物成帳」の村名が「備陽記」(6)に載っていますが、それと一致しない村名もこの絵図には少なくありません。後の寛永国絵図(7 備前国九郡古図)や正保郷帳(3 備前国九郡之帳)の村名と違っているものもあります。

郡境が違う所も二ヶ所あります。一つは吉井川の東側で、邑久郡に含まれるはずの「豆田」「八日市」「福岡」の三ヶ村が上東郡になっています。もう一つは旭川の東側で、ここでは御野郡の内とされるたけ田(竹田)「かひら(川原)」「はま(浜)」の三ヶ村が上道郡となっています。

Q 岡山城下町の川東は 3こんなに立派か？

絵図の中でひととき目を引くのは、岡山城下町の描写です。とりわけ本丸は、天守閣をはじめ多数の櫓が絵画的に表現されています。旭川西側の城下部分では、丸の内の二重の堀と内堀・中堀・外堀が正確に描かれています。外堀は慶長6年(1601)に小早川秀秋によって作られたものです。池田氏の時代にはそのさらに外側に寺町や侍町が拡大していきますが、それは描かれていません。他方、旭川東側の景観は実際より面積も広く立派過ぎますし、存在したことのない堀に囲まれているのも奇妙です。旭川には京橋・中橋・小橋の三つの橋が架かっていましたが、この絵図では旭川の中洲である東西二つの中島を一つに描いたため、橋の数が一本少なくなっています。

Q 児島だけ山形の向きが 4違うのはなぜか？

この絵図では、交通関係の記載が全体として貧弱です。街道は朱線で示されますが、一筆で細く引かれるのみで、西国街道(山陽道)など主要なものを地方の間道と区別して太く描くこともありません。河川には板目状の模様があり、海には装飾的な波形が描かれていて、海上の航路や里程、河川の渡河方法や川湊の記載もありません。河川も主なもののみで、正確さに欠けます。山形は、基本的に南から北を見た一方向で描かれており、この絵図が海から見た視線で描かれたことを示しています。ただし、山形の方向がこれと異なる所が三つあります。一つは、片上・牛窓・田井の沖の島形が、対照的に北から南を見た形になっています。これは、これらの島の北側が航路であったことを示しているでしょう。二つは、岡山城下から西方に見える山形が東から西を見た形になっています。これは、宇喜多氏による築城以来、岡山城が西方(具体的には毛利氏)に備える空間構成をとっていることと関連していると思われます。三つは、児島だけ山形が西から東を見た方向になっていて、全体とは異なっています。これも西国から上方へ向かう航路の関係でしょうか。児島は完全に島として描かれていて、藤戸の瀬戸には波形も描かれ、天城は三つの島形で示されています。児島が備前国の中でも独立した世界であることを示しているようで、山形の方向はそのことを強く印象付けます。

Q 児島の堤に囲まれた 5入海はなにか？

児島といえば、その北岸中央部の堤で囲まれた入海が目を引きまします。干拓による新田開発の予定地を示したものでしょうか。この地は常山古城の東方にあたり、中世には加茂川河口部の入海でした。近世前期には東西両側の槌ヶ原村と用吉村から新田開発が行われていますから、その様子を示すのかもしれませんが、それにしても形が大き過ぎる気がしますし、なぜこの地だけがこのような特異な表現をとるのかも分かりません。

児島内海の新田開発は北方の干潟から進みました。忠雄時代には御野郡南部で開発が進み、寛永国絵図にはこうした新田村が村形で示されていますが、この絵図ではそれらの姿を見ることはできません。さらに光政時代に上道郡・邑久郡での新田開発が進みます。この絵図は、そうした開発以前の古い海岸線を示しています。

Q 下津井城はいつあったか？ 6なぜ八塔寺だけ描かれるのか？

この絵図では下津井城と金川城が絵画的に描かれています。いずれも池田家の家老が居城としたもので、下津井城は慶長11年(1606)に池田河内(長政)が築いたと言われています。五層の天守閣と西丸・二丸および湊に臨む高台の三層の望楼が描かれています。この両城が幕府の一國一城令によって破却された時期はよく分かりませんが、寛永国絵図(7)では、ともに古城となっています。

城郭以外で建物が描かれるのは八塔寺のみです。二つの大きな堂と七重塔が確認できます。八塔寺は天平時代に創建された古刹で、源頼朝が八塔伽藍を建立したことから、八塔寺と呼ばれるようになったとも言われています。戦国時代に戦火にあつて一時衰退しましたが、池田忠雄が伽藍を再建し、以後岡山藩の荘園を受けました。この絵図でなぜ八塔寺だけが特別扱いされるのか分かりませんが、備前・美作・播磨の国境に位置することから、軍事的な意味があったのかもしれない。

備前国図が他の国絵図とは異なるふしぎな点をいくつかあげてみました。

皆様もよくご覧になると、まだまだふしぎな点をいくつも発見できるでしょう。そうしたふしぎな点の意味が明らかになった時、この絵図が何のために誰によっていつ作られたかが明らかになるでしょう。



「展示品解説」

1 備前国図

(⊕T1-5) 324.0cm×275.0cm (表紙)

彩色も鮮やかな備前一国図。全体の描法は寛永期以前の古い画風を残しており、慶長期のものと考えられる。

ただし、幕府に提出された慶長国絵図との関係は明らかでない。

2. 慶長九年御検地帳写

(日笠家文書 213) 慶長9年(1604)閏8月
16.6cm×48.0cm

藤戸村の検地帳から、庄屋日笠源右衛門の所持地を一筆ごとに書き抜いたもの。田畑合2町7反24歩半。検地奉行は、矢崎十右衛門・春日重三郎。朱筆は慶応2年(1866)6月に改めた時の持ち主を注記したもの。慶長九年の検地帳は備前各地に残されているが、この時の検地は極めて不徹底であったといわれている。

3. 備前国九郡之帳

(⊕B3-35-1) 30.4cm×22.7cm

備中国十一郡帳

(⊕B3-35-2) 30.4cm×22.5cm

幕府の命によって作成され、正保2年(1645)に国絵図とともに提出された郷帳。郡ごとに村を書き上げ、朱印高や村況が記されている。村名の難字には朱で仮名が付してある。郡ごとに村高・村数の集計があり、備前一国高は28万200石。備中分には村ごとに領主名が記されている。

4. 領知判物写

(⊕B1-47) 寛永11年(1634)8月4日
46.1cm×65.3cm 27.3cm×19.9cm

3代将軍家光(大猷院)が備前少将(池田光政)に与えたもの。備前一国28万200石・備中国4郡の内3万5000石、都合31万5200石が岡山藩の正式の領知高(朱印高)。原本は、家光が京都二条城で西国大名に一齐に領知宛行状を発給した時のものであるが、本史料は、松平内蔵頭(池田治政が慶政)が家督を相続する時に幕府に提出した写し。

5. 領知目録写

(⊕B1-31) 寛文4年(1664)4月5日
39.9cm×212.3cm

4代将軍家綱が全国の諸大名に一齐に領知判物を発給した、いわゆる寛文印知の時、判物と一緒に渡されたものの写し。幕府奏者番の永井伊賀守(尚庸)・小笠原山城守(長頼)から松平新太郎(池田光政)にあてられている。岡山藩の領知である備前一国8郡および備中国6郡の内について村数と石高が書き上げられている。

6. 備陽記

(A2-1~16) 享保6年(1721) 26.8cm×18.9cm

郡奉行などを歴任した岡山藩士の石丸定良が編さんした地誌。記述も正確で利用価値が高い。35巻16冊。巻10から巻19までは領内の各村の明細を郡ごとに記すが、各郡の最初に「慶長十年備前国高物成帳」から庄・郷・村の名称を書き出している。この「慶長十年備前国高物成帳」が、国絵図とともに幕府へ提出されたものか。その村名と1. 備前国図のそれとは一致しないものも少なくない。また邑久郡豆田村には「此村古ハ上道郡之内也」とあり、1. 備前国図がより古い状況を描いたものであることがわかる。

7. 備前国九郡古図

(※T1-14) [複製]
(原本は193.4cm×188.5cm)

「寛永古図」として伝えられるもので、寛永15年(1638)頃に作成されたと考えられている。村は郡別に色分けされた小判形で示され、内に村名と村高が記されている。郡境は金泥で、道路・海路は朱線で描かれ、行先などが簡単に注記されている。旭川東岸の竹田・東川原・西川原・浜の4ヶ村は、村形は三野郡、地は上道郡の色で塗られている。郡境は東川原村・浜村の東側に引かれている。展示したものは、原図を60/100に縮小複製したもの。



8.岡山城下切絵図（東 小橋以东）

(※T6-8) 94.7cm×65.0cm

岡山城下を四つに分割して描いた切絵図のうちの1枚で、旭川の東側の部分を描いたもの。寛永16年(1639)から万治2年(1659)まで花田にあった台徳院(徳川秀忠)廟が描かれているから、その頃の景観を示すもの。西国街道(山陽道)沿いに町屋があり、重臣の下屋敷や鉄砲衆・伊賀者の屋敷なども建っているが、「野田」と記された所も多い。



9.海瀬舟行(上)

(⊕T8-76) 27.4cm×1431.8cm

箱入り5巻本のうち1巻。瀬戸内海を中心に、大坂から九州平戸までの航路と景観を描いたもの。前書に「道法八大底二寸ヲ以テ一里二定ム」とある。17世紀後半に作成されたものと思われ、描法・彩色・装幀もしっかりしていることから、藩主の鑑賞などに供し

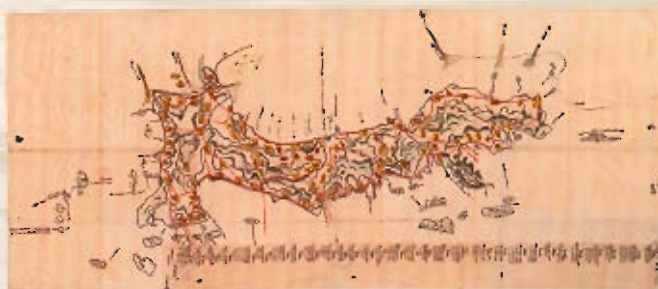
たものと思われる。陸地の山形は航路から見た形を基本としており、児島の山形も北と南から見た形になっている。



10.児島郡図

(※T2-90) 万治4年(1661) 94.2cm×218.8cm

右端に「万治四 児島」「石川善右衛門」の書き込みがあり、石川善右衛門が庄屋名などを村別に書き上げた「児島郡人書付」が貼付けられている。石川善右衛門は当時児島郡の郡奉行であったので、その郡方支配に使われたものと思われる。村形は小判形で黄色に塗られ村高の記載はない。道は朱色で太さに違いがある。山形は、海側もしくは主要道から左右に見た形に描かれている。



常山古城の東、用吉村あたりには、1.備前国図にある入海らしきものは見えない。

11.和気絹(白鶴堂叢書六)

(910-5-37) 27.0cm×19.0cm

高木太亮軒が宝永6年(1709)に著した私撰の備前国地誌。

古城・古蹟・神社・仏閣・山川・人物・土産・名所などについて郡別に記

している。児島郡のうち「常山城」の部分展览展示した。

12. 児島郡御朱印高改出シ年々開田畑万引高差引帳

(B3-10-3) 貞享元年(1684)5月 28.2cm×20.8cm

寛文12年(1672)に2万5000石を与えられて分家した池田政言は、貞享元年(1684)に將軍の朱印状を得て正式に鴨方支藩とな

った。その時作成された全領地の改帳のうちの1冊。村ごとに朱印高・又高・二口高など村高の構成がわかる。

13. 上道郡新田図

(※T7-99) 79.6cm×94.2cm

端裏貼紙に「上道郡新田之絵図」「故大御納戸」とある。松崎村前に朱で堤が示され、付箋に「此内今度被 仰付候新田」とある。いわゆる松崎新田で、寛文3年(1663)に完成する。正保4年(1647)に開発された笠井新田・福吉新田や海面新田・円山新田・中川新田が描かれており、上道郡での新田開発の様子がわかる。



14. 上道郡沖新田図

(※T7-94) 78.3cm×79.5cm

倉安川と倉田・倉富・倉益の三新田が開発され、さらにその先に沖新田が計画された時の絵図。下書きのような筆で百間川の川筋も書き込まれている。元禄8年(1695)の沖新田の完成で、上道郡の新田開発は終わる。



15. 邑久郡新田図

(※T7-109-5) 95.1cm×82.2cm

貞享元年(1684)に津田重二郎が開発に着手した幸島新田の計画図。小島の間を堤で締め切り、その内側の干潟を新田とした。西鴻島には「今度切抜、水門ヲ仕、悪水ヲ抜可申所」として紺色の紙が貼られている。鴨越井関から吉井川の水を引き「今度掘可申用水溝」も水色の貼紙で示されている。

16. 池田家履歴略記 三

(A8-3) 23.8cm×16.3cm

池田家の事歴や岡山藩内の出来事を編年に記したもので、編者は岡山藩士の斎藤一興。展示したのは慶長11年(1606)の「造下津井城」の項。この年

池田河内(長政)が下津井城を築いたこと、慶長14年(1609)に池田出羽(由之)が在番となり、同年7月23日池田利隆が天守に登ったことなどがわかる。

17.撮要録 巻25

(A5-26) 26.9cm×18.9cm

岡山藩の農村支配に関する基本史料を編集したもので、藩の留方が作成した。展示したのは、寺社之部和気郡、八塔寺の項。文禄4

年(1595)12月に宇喜多秀家から寺領50石を安堵され、池田家の時代には36石4斗5升4合を与えられていた。

18.下津井海岸見取絵図

(※T8-103) 58.2cm×133.5cm

幕末期、海防のため下津井に御台場を築いた時の絵図。下津井村の背後に下津井城跡が見え、本丸・西丸・二丸・波多野丸の書き込みがある。元和元年(1615)の幕府の一国一城令によって廃止されたが、正確な廃城の年はわからない。



19.八塔寺之図

(※T2-114-3) 27.8cm×40.6cm



八塔寺近村大略図

(※T2-114-4) 40.6cm×55.0cm



八塔寺御備所之事

(※T2-114-8) 13.8cm×87.3cm

八塔寺は源頼朝が八塔伽藍を築いたという由緒のある古刹である。また、播磨・美作と境を接しており、国境防備の要地でもあった。幕末期に、八塔寺を御備所として御台場を設ける計画が持ち上がり、その時作成された絵図類から、絵図2枚と書付1通を掲げた。

[パネル] 岡山古図

(※T6-5) (原図は515.4cm×309.0cm)

現存する最も古い岡山城下図。寛永9年(1632)、池田光政が鳥取から岡山に転封となった際に、家臣の屋敷割に使われたもの。外堀の西側は既に寺院や侍屋敷が建ち並んでいる。それに対して、川東はまだ開発が進んでいない様子がわかる。

